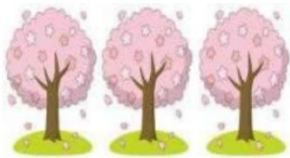


高取小だより

令和7年10月10日



三本桜

第24号

ふかく考える子 あたたかみのある子 がんばりのきく子
10月の目標：好きな本をみつけよう

前期から後期へ

秋らしい陽気の日が増えてきました。毎年のことですが、秋は読書の秋、スポーツの秋、芸術の秋、食欲の秋など、あらゆることへの取組が、最もはかどりやすい季節と言われています。まだまだ「感染対策を講じて」という条件を付けなければなりません、高取っ子の秋が、実り多いものになることを願っています。

さて、10月は前期を締めくくり、新組織を立ち上げて後期がスタートします。前期の組織で作りに上げてきた日常をしっかりと引き継ぎ、さらなる向上に向けて強い願いをもったリーダーを中心に、後期の組織がスタートすることになります。力強く学級・学年・学校を引っ張ってくれることを楽しみにしています。また高学年は、宿泊行事が予定されています。行事には必ず目的や意義があります。そして、そのねらいを意識して目標に向かって取り組む過程の中で、学級や子どもたちが大きく成長します。私は、子どもから大人へと著しく成長していくこの多感な時期、一人ではできないこと、一人では味わえないことを仲間とともに挑み、仲間とともに協力して物事を成し得ていき、喜びを分かち合えるよさが学校行事にはあると思います。準備過程では、決して順調に進むことばかりではなく、時として課題にぶつかり、苦勞する場面も多々あるかと思います。しかし、このような時こそ、協調性を十分に発揮し、お互いが知恵を出し合い、一つ一つの壁を乗り越えてほしいです。そして、得た「自信」が、今後への大きな成長の一步となることを心から願っています。

あかり&さあや

これは、令和7年度の児童会役員が考案した児童会イメージキャラクター「あかり&さあや」です。この度、児童会役員がペットボトルキャップで「あかり&さあや」を作成しました。中校舎への渡り廊下に掲示されています。



失敗を恐れない子になってほしい

恥の多い生涯を送って来ました。

自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです。

太宰治『人間失格』より

「自分に自信がもてない」「生きていくことが不安」「人間が怖い」・・・、生活をしていくうえで、ふとこんなふうに感じてしまうことはあります。私たちが人知れず抱えている、劣等感、不安、恐怖・・・。大人であっても、子どもであっても、その大きさに差はあれど、同じでしょう。それらを真正面から描いたのが、太宰治の名作小説『人間失格』です。

主人公・大庭葉蔵は自らを「人間失格」と称し、社会から疎外された存在として描かれています。彼の心の葛藤や苦悩が、作品全体に暗くて重い雰囲気を与え、また、私と重なるところがあるため、この『人間失格』には引き込まれるところがあります。

読解力がなく、作者の言いたいこと、伝えたいことを正しく受け止められているかどうかはわかりませんが、自分らしさを大切にすること、他者との関係の築き方を学ぶこと、心の強さと弱さの受け入れ方を知ること、本音と建前のバランスをとることを語っているのだと思います。

子どもは失敗を経験することで、新しい知識やスキルを身につけていきます。失敗したとき、子どもは「悔しい」「恥ずかしい」と感じるかもしれません。しかし、その悔しさこそが、新しい知識やスキルを吸収するきっかけになります。

例えば、テストで間違えた問題は、正解した問題よりも強く記憶に残ります。これは、間違えたことで「なぜこの答えではダメだったのか？」と考え直す機会が生まれるからです。このように、失敗は深い学びへとつながりやすいのです。また、スポーツの世界でも、トップアスリートたちは「負けた試合こそが一番の学びになった」と語ることが多いです。悔しさをバネにして、「次はどうすれば勝てるか？」を考え、成長するからです。

子どもが失敗したときこそ、「この経験から何を学べるかな？」と問いかけることで、単なるミスではなく、成長のステップに変えることができます。成功体験はもちろん大切ですが、失敗を乗り越えた経験こそが本物の自信につながります。

例えば、ある子どもがピアノの発表会でミスをしてしまったとします。一度のミスで「もうダメだ・・・」と諦めるのではなく、「次こそは成功させる！」と努力を重ね、次の発表会で上手に演奏できたとき、その子は大きな自信を手にするでしょう。

このように、「失敗→改善→成功」のサイクルを経験することで、子どもは自信をもって挑戦できるようになります。「うまくいくかどうか」ではなく、「挑戦し続けることが大切」という価値観を育てることで、子どもは失敗を恐れずに成長できるようになるのです。これからも保護者の皆様とともに子どもたちを支えていきます。

